

# 新しい環境への適応

## － 適応の概念と転校生の 学校適応に関する調査報告(1)－

塚本 美恵子

### I はじめに

#### 1. これまでの研究の背景と問題

日本社会の国際化の動きに従って異文化環境への適応という問題がクローズアップされている。日本経済の空洞化が懸念される程に日本企業の海外進出が活発になり、それに伴って多くの駐在員やその家族が海外に出向いている。また逆に、難民を装ってまで日本に入国しようとする偽装難民に見られるように、“富める国”日本で働く外国人は日に日に多くなっている。東京・築地市場内で働く外国人の占める割合は、全体の2%を占め、今や貴重な労働力となっているというし<sup>(1)</sup>、自動車部品業界で働く外国人の数は5千人以上という報告もある<sup>(2)</sup>。このように近年は海外で生活する機会や、外国で育った人たちと日常生活の場で接する機会が増えており、異文化理解や異文化環境への適応の研究が急務となっている。

筆者はこれまで異文化間での適応という観点から、帰国生に焦点を当てて研究をすすめてきた。筆者自身も海外滞在を経験し、その中で子どもを育て帰国した当事者の立場にあり、海外滞在中、帰国後も様々な日本人家族と交流し参与する機会をもった。そのような中で、子どもの現地社会への適応、あるいは帰国後の適応は、親の現実肯定的な態度や積極性によって影響を受けるのではないかという印象を強く持った。また帰国生の適応に関する先行研究を調べるうちに、多くの帰国生調査における対象者が帰国子女受入校のみに偏っている点に疑問を持った。海外からの帰国生の大半を占める小学生

の場合を例にとってみても、ほとんどが地域の小学校に受入られており、帰国子女受入校に入る子どもは全体からいえばごく少数である。その上これら調査対象校として選ばれる学校、例えば帰国子女のためクラスを設けている東京学芸大学附属小学校では、帰国生受入に際し、地域の学校での受入が難しい者、といった選抜のための優先基準をもうけている。このような基準で入学を許された帰国生を対象に行った調査結果から平均的な帰国生の姿が浮かぶとは考えにくい。調査研究は対象者を帰国生受入校のみに偏ることなく、一般校に在籍する帰国生も含めてなされるべきであろう。以上のような背景から広く一般校に転入した帰国生の実情を把握するため調査を実施した。調査に際しては、帰国後さまざまなボランティア団体に参加している帰国生を持つ母親を対象とし、母親の見た帰国生の姿を捉えた。303名の回答を分析した結果、親の積極的な態度と子供の適応には正の相関はみられなかったが、親のあせりの気持ちと帰国生の不適応には相関があることが明らかになった(塚本1987)<sup>(3)</sup>。

この調査の過程で行なった帰国生やその家族へのインタビュー調査では、適応にはかなりの時間が必要だということが繰り返し指摘された。帰国子女の適応期間に関しては、すでは小林ら(1975)により、約80%の帰国生は帰国後1年以内に適応するという報告がなされている<sup>(4)</sup>。しかし帰国生自身の報告や、筆者の子ども達、それに海外滞在以来知り合った日本人の友人知人の子ども達の様子から、彼らの内面的適応は、1年といった短期間では充分になされないことが察せられた。そこでフィリップ・ボック(1977)<sup>(5)</sup>の異文化適応過程の理論に沿って、帰国生の適応を物理・生物的環境、社会的環境、内面的環境という3側面に分けて分析し、帰国生の適応と経過期間及び帰国年齢との関係を調べた。その結果、物理・生物的環境については帰国後18か月前後で適応し、それ以外の社会的適応、あるいは内面的適応についてはさらに期間が必要であると考えられることがわかった(塚本1989)<sup>(6)</sup>。

これらの研究をすすめる過程において、次のような点が課題として浮上してきた。

①国または民族間移動を対象とした異文化適応の過程をさらに明確にする為には、帰国生と状況の似かよっている国内転校生がどのように適応してゆくのかを調査研究する必要がある。文化差の小さい国内の移動における適応過程の研究を行い、比較検討し、類似点と相違点を明確にすることにより、逆に帰国生の特性が浮彫りにされるであろう。

②適応の概念を明確にする必要がある。本来使われていた生物学の分野における適応の概念が、広く一般に使われるにつれ、各研究領域ごとの適応の意味合いに違いが見られるようになっている。従って様々な研究領域からの、似たような適応状況における研究を参考にする際に混乱が生じるおそれがあるので、各研究領域における適応の定義を大まかに把握しておく必要がある。

といった点である。

## 2. 研究目的

上述のような研究背景から、

「人が新しい環境に置かれた時、どのように適応していくのか、その新しい環境に慣れるのにどれ位の期間が必要か、また適応を促進する要因は何か」という研究課題が生じてきた。従って本稿の研究目的を

- (1) 適応の概念の明確化
- (2) 転校生の適応期間と促進要因

とした。

## II 適 応

### 1. 適応の概念と定義

まず一般的な概念としての適応を広辞苑でみると、「①その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること。②〔生〕生物が、環境に適合するように、自己の形態・習性などを変化させる現象。遺伝的な変化と、そ

うでないものがあり、狭義には後者を順応と呼んで区別する。応化。」とある。本来生物学的領域で使われていた適応という用語が、様々な領域で使われるようになると、その概念も多義的となってきた。例えば、心理学でよく引用される北村（1965）の定義によると、「適応とは、主体としての個人が、その欲求を満足させながら環境の諸条件のあるものに、親和的關係をもつ反応をするように、多少とも自分を変容させる過程である。」とあり、適応を変容の過程ととらえている<sup>(7)</sup>のがわかる。文化人類学の立場をとる香原（1985）は、「適応 adaption とは、生物がその形態や生理・生化学的機能、行動、生活方法などにつき周囲の環境にうまく対処して生きていくことである。」と定義し<sup>(8)</sup>、「適応とは何かという問いは、生物の存在とは何かと根を同じくする」としている。また生態学の領域では「生態学がとくに着目するのは基本的な適応手段としての活動あるいは行動であり、それをたんに生理学的な反応としてではなく、生存のために必要な環境の利用として把握することに特徴がある。」（大塚1987）としている<sup>(9)</sup>。このように適応という語は使われる領域により概念にずれがみられ、多義的となっている。

また「適応」の訳語も研究領域により一致しない。香原が指摘しているように、例えば心理学で「適応」と訳される adjustment は、文化人類学では「順応」と訳され、また逆に文化人類学において適応と訳される adaptation は心理学では「順応」となり、それに類する語も多い<sup>(10)</sup>（表1参照）。

このように適応の概念は、①研究領域により定義が多義的であること、②訳語が不一致であること、さらに③類似する用語や近縁の表現が様々にあることなどにより、概念が明確になりにくく、異領域間では混乱を招くこともある。従って適応という用語を使用する際には、その都度、定義を明確にした上で論をすすめる努力がなされるべきであろう。

本稿における適応の定義は、適応が個人と環境のダイナミズムにより発生すること、さらに今日の社会環境では生物学的適応もさることながら、社会的環境に適応していくことがより大きなウェイトを占めていると考えられる

表1 適応に関わる用語

adaptation	生	適応	狭義では遺伝的性質による
	人	適応	自分自身による
	心	順応	個体について
	医	適応・順応	
adjustment	生	調整	狭義では非遺伝的なもの（個体）
	人	順応	自分の行動による
	心	適応	社会的な
	医	適応・順応	
regulation	生	調節	非遺伝的なもの（群）
	医	調節	
fitness	生	適応度	
	医	適性	
accommodation	医	調節・順応	
acclimatization	医	季節順化	風土順化 自然現象に対し
		生涯順化	生涯中の環境変化に対し
acclimation	医	気象順化	単一の気象要素の変化に対し
		気候順化	一定期間のある気候に対し
habituation	医	慣れ・習熟	短期曝露に対する行動反応
compatibility	医	適合性	
homeostasis	医	ホメオスタシス・生体恒常性	

生：生物学 人：人類学 心：心理学 医：医学

人類学講座「適応」より

ことから、基本的には北村の心理学的立場、すなわち適応を変容の過程とし加えて環境との相互作用である点をさらに強調したい。つまりここで言う適応とは、個人と環境の相互作用により生じ、主体としての個人が環境との親和的關係をもつ変容の過程であるとする。

## 2. 適応に関する先行研究

適応は、個人と環境のダイナミズムにより発生する。したがって異文化適応に関する文献を環境サイド、個人サイド、そして環境と個人の間の3サイドに分けて概観してみることができる。ここでは特に、①適応すべき環境にはどのようなものがあるのか、②本人がどう認知し対応するか、③どのような経過をたどって適応していくのか、といった3つの観点に重点を置きながら先行研究をレビューし検討してみたい。

### ① 適応環境

適応すべき環境は、理論的にはフィリップ・ボックの唱えるように物理・生物的環境、社会的環境、内面的環境の3つ、あるいは人間-環境相互交流理論を提唱したワプナーら (Wapnerr 1973) のように、物理的環境、対人的環境、社会文化的環境の3側面<sup>11)</sup>に分けることができる。しかしこれらは抽象度の高い理論であり、物理的(生物的)環境以外の社会的環境と内面的環境あるいは対人的環境と社会文化的環境は、1つの事象の表裏である場合が多く、実際の調査研究では扱いにくいという問題が残る。

### ② 認知と対応と年齢

新しい環境をどの様に認知・評価するかにより、対応に違いが生じる。同じ環境に置かれても、その環境の認知のされ方は本人の性格、状況、思考傾向、過去の経験等により異なり、この差が適応に違いをもたらす。星野(1987)はこれを

- (1) 促進的環境：ある個人の欲求(ニーズ)の充足を可能にしてくれると認知される環境条件
- (2) 拘束的環境：ある個人の欲求(ニーズ)の充足を防げると認知される環境条件
- (3) 剥奪的環境：ある個人の能力・資源を減少・消滅させるような要求(をつきつけている)主体として認知される環境

の3つに分類している<sup>(12)</sup>。新しい環境を促進的環境として認知する、すなわち肯定的、好意的、積極的に評価するのと、しないのとでは、適応に違いが生じる。箕浦（1985）は、滞米中の日本人の母親を対象に行った同化度の調査で、駐在を好意的・積極的に受け止めることが適応力と相関が高いことを報告している<sup>(13)</sup>が、これなどもその例である。

しかし置かれた環境が本人の望む方向ではないと認知された場合は、果たして適応過程は取られるのであろうか？ 前述のワプナー（1973）は、生活体は、本来目的志向的であり、自分をその環境の中に定位するよう動機づけられている存在であるとの仮説をたてているが、新しい環境が拘束的あるいは剥奪的環境と認知された場合に、環境との調和的關係を持つようとする適応へのプロセスがとられるかは、疑問である。しかし香原の述べているように、自損的適応を適応のカテゴリーの中に含めて考えれば、これも負の適応としてとらえることができる。さらに一旦否定的に捉えられた環境も、刻々と変化する個人と環境のダイナミズムの中で再び認知作業が行われ、その時点から改めて正の適応認知が取られることもある。

一般に促進的環境と認知された場合には、どのような適応過程をたどるのであろうか。スパイロ（Spiro 1966）は異文化環境では、まず違いを認知し、次に現地の人と同様に行動し、最後に感情も人と同じように感じられるようになる<sup>(14)</sup>、適応のプロセスが認知・行動・感情の順に移行している。しかし拘束的または剥奪的環境と認知された場合は、この3者の適応度に差が生じるため、タフトが述べたように（Taft 1977）<sup>(15)</sup> 3つの側面としてとらえた方が理解しやすい。例えば波風を立てないために上司の言う通りにしているが（行動+）、相手を気に入らない奴だと感じていれば（認知-）、相手が何を言っても気に入らず、“坊主にくけりゃ袈裟まで憎い”状態に陥り（感情-）、適応がすすむとは考えにくい。また人種偏見を持つことはいけないことだと充分理解しているつもりでも（認知+）、隣に膚の色が違う人が座ると何となく荷物を手元に引き寄せる（行動-）、その行為を恥じて相手に悪かったかなと思う（感情+）場合などがあることを考える

と、認知・行動・感情は段階的に移行するのではなく3つの側面として捉えた方が、実際に即しているように思われる。

さらに各個人のパーソナリティに係わる部分で、変化の比較的容易な領域とそうでない領域があるように思われる。個々人のこだわりや興味等によりその領域が異なり、例えば食生活は非常にこだわるが服装には頓着しない人とか、清潔さには気を配るが時間はあまり気にしない人など色々な場合がある。このこだわる、あるいは嗜好の強い領域では、新しい環境に置かれた場合、適応に時間がかかり、そうでない領域では適応が比較的スムーズに行われると考えられる。またその人の持つ融通性も適応に影響をあたえらる。箕浦<sup>(16)</sup>は対人関係領域のイデオバースがパーソナリティ体系の中に取り込まれる過程に係わっている要因として、個人の側のレディネス（準備性）と相互交渉の量をあげているが、箕浦の言うレディネスとは、ここでいう融通性とこだわり、それに現実を肯定的、積極的に受け止める態度を合わせて表現したものと考えられる。

上述のような新しい環境に対する認知と対応が行われる成人に対し、成長過程にある子どもたちが行う認知との違いも考えなければならない。ピアジェによると、事物を差異によって分類出来るようになるのが7～8歳以降、具体的事象のみならず仮説や命題で論理を組立てられるようになるのが11～12歳ということである<sup>(17)</sup>。箕浦も帰国生対象の調査で、6、7歳以下の子どもにとっては、差異を認知していてもそれを言語化するのが難しいのか、「無言」もしくは「分からない」という反応が圧倒的に多いのに対し、7～10歳で帰国した半数の子どもが差異を身体的特徴の違い、言葉や遊び方の違いといった具体的レベルで認知していると述べている。一方11歳以上では7割の者が差異を対人関係の質の違いとして認知しているとしている<sup>(18)</sup>。

### ③ 経過と期間

異文化環境に入った時の適応はどのような経過をたどるのだろうか。

時間的経過を追って位相を考えたものにアドラーのものがあげられる。ア



ドラー（Adler 1976）はカルチャー・ショックを乗り越える過程として5つの位相（接触・不統合・再統合・自律・独立）を提示している<sup>(19)</sup>。

ではこのような過程をたどって新しい環境に適応するには、どれ位の期間がかかるのであろう。経過期間について具体的に述べているものは少ないが「適応の条件」を著した中根（1984）は「日本人が現地の人々と真剣に取り組んだ場合で、理解度が相当な水準に達し、仕事がスムーズにできるまでにだいたい5年が必要と思われる」と記している。

箕浦は人間関係の意味体系という視点から長期滞米後の帰国生の場合の分析を行っている。それによると、初めの一年は、表面的な違いに対応するのに手一杯で、日本が外国のように感じられ、この段階では違いは可視的であり、周りも初めから予測しているので、比較的対処しやすいが、行動面での違いへの対応が終わる頃に、“本格的な違い”が意識され出すとしている。この転機が2年半から3年経過したあたりにやってくると報告している<sup>(20)</sup>。

### Ⅲ 転校生に関する適応研究

#### 1. 転校生の捉え方

転校生は多い。われわれの周囲にも転校経験者は沢山いる。しかし日本全体でどれ位の転校生がいるかはつかめない。転校生の実数は市町村単位で把握されるが、ここでは児童生徒数の増減、すなわち転出と転入の差のみが集

表 2. 転入・転出生徒数（入間市）

	総生徒数（5 / 1 現在）			転 入			転 出			転入・転出総数		
	小学校	中学校	計	小学校	中学校	計	小学校	中学校	計	小学校	中学校	計
昭和57年度	13,583	5,812	19,395	541 3.9%	144 2.4%	685 3.5%	582 4.2%	132 2.2%	714 3.6%	1,123 8.2%	276 4.7%	1,399 7.2%
昭和59年度	13,467	6,489	19,956	784	163	947	579	129	708	1,363	292	1,655
昭和60年度	13,133	6,954	20,087	663	160	823	468	131	599	1,131	291	1,422
昭和61年度	12,776	7,229	20,005	825	180	1,005	544	113	657	1,369	293	1,662
昭和62年度	12,710	7,308	20,018	1,003 7.8%	220 3.0%	1,223 6.1%	583 4.5%	120 1.6%	703 3.5%	1,586 12.4%	340 4.6%	1,926 9.6%

\* 58年度はデータなし

\*\* 入間市教育委員会のご好意による。

計され、県へと報告される。児童生徒数の増減はクラス数、教員数そして予算に影響を与えるため掌握されるが、転校生の数は全国規模で把握されることはない。

表2は埼玉県入間市における昭和57年度から62年度の転校生数である。転入・転出数の総生徒数に対する割合は、昭和57年度に7.2%であったものが、昭和62年度には9.6%と増加している。

昭和62年度の転入生は小学校で7.8%、中学校では3.0%と小学校時期の転校が多くなっている。

転校生を説明する必要はないであろうが、ここでは従来の転校生のとらえ方の例として教育相談事典の説明を引用したい<sup>(21)</sup>。転校生では該当する項目はなく、転入学として以下の説明がある。「転入学は親の転居に伴うことが大部分であるが、児童生徒の指導上問題になるのは、転居による環境の変化だけでも大きな影響を及ぼすのに加えて学校がかわることによって感情的に不安定となり、このことが学力・性格・行動などに望ましくない影響を与えるからである」としている。ここにあるように、転校は従来否定的な要素としてとらえられていたが、横島(1977)が指摘しているように<sup>(22)</sup>、現実が増える傾向にある転校生に対しネガティブな見方をすること自体が、転校生にマイナスの作用を与えているというのも事実であろう。

## 2. 転校生に関する先行研究

転校生に関する先行研究は少ない。その中でも、転校生の交友関係の成立過程に焦点を当ててソシオメトリック・テストを実施した横島(1977)の調査研究が参考になる。横島は宇都宮市内に4月に転入した小学5・6年及び中学2年の転校生38名と彼らが在籍するクラス全員を対象に、2度のテストを実施している。小学校の転校生の場合、この2度のテストの間わずか100日間で交友関係は大きく変化しており、転校後約半年で大体交友関係が安定している事を報告している。また面接調査から、適応に影響を及ぼす重要な要因は転校経験の有無であり、転校経験者は転校に際しての不安も少なく、

友人を得る方法も心得ているという。また都会的な子どもで明るく振る舞い、多くの人に話かける生徒はすぐさま人気者になるが、一見無理するため10月頃にはI Sの低下を示している例をあげ（小学生女子）、転校生の指導は転校直後のみではなく、転校後一定期間経過してから急激に変化した者を指導する必要があるという。またこの他に一般に転校生の適応にとって不利だとされる地域差の大小や転校理由、特に家庭に問題がある場合もほとんどその影響は無かったとしている。成績については、横島の面接調査では学力が“下がった”と自己評価している中学生が多く、小学生ではわからない、あるいは変わらないとした者が多い。

一方中川（1977）は教師の立場から自分が担任した中学転入生117名についての分析を行い、農村部よりの転入生には英、理、国に成績の低下がみられ、大都市よりの転入生には数、社に成績の低下がみられたと報告している。また中川の調査では卒業生628人のうち18%が転校経験者であったという<sup>(23)</sup>。

大庭の実施した質問紙調査でも（1986）、女子短大生624名、附属高校生75名の調査対象者のうち転校経験者は17.9%と、中川の調査とほぼ同じ数となっている。さらに転校で困った事は言葉17%、学習17%、友人関係12%、また違和感を感じたのは方言・アクセント28%、友達・仲間・人間関係が11%、習慣・気質・感覚・風習11%といったデータを報告している<sup>(24)</sup>。しかしこの大庭の調査は、大半が小学校時に体験した転校経験を、短大または高校生になってから回想により答えたものである点、どこまでその当時の心境を把握しているかに疑問が残る。

### 3. 調査方法

本調査は埼玉県入間市の教育委員会の了解を得て、市内西部6つの小学校の協力のもとに実施した。

まず調査実施地である入間市の概略を述べると、昭和41年に市となり、現在人口約13万人。市内には自衛隊基地やN T T等の社宅もあり、人口の移動は常時一定数あったが、それに加え近年は東京のベッドタウンとして住宅建

設が活発化し、住宅の販売時にはまとまった児童生徒の転入がある。このような状況から、学校側も児童側にも転校生の受入には比較的慣れた雰囲気にあるといえよう。

本調査は昭和63年9月に転入した小学生を対象に調査を実施した。調査実施方法は、調査対象の5つの小学校では学校を通じて質問紙を転校生本人と保護者、それに転校生担当の教師の3者に配布した。調査用紙の回収後、調査回答者を各家庭に尋ね面接調査を行った。残る1校は転入生リストをもとに質問紙調査依頼を筆者が直接行い、その後再度面接調査に訪れた。担任教師への面接は各学校の職員室及び教室で行った。転校生本人および保護者への面接調査は転校2か月後と転校6か月後の間、2～4度行い、面接時間は1回20分から2時間であった。

3者の質問紙の回答と面接調査の揃ったのは29組、質問紙の回収率は58%であった。

#### 4. 結果と考察

29名の転入生が対象となっているが、その家庭数は20である。

まず転校の理由は、父親の転勤が4 転居が15、その他の理由1となっている。

親の転校についての考えを聞いたところ、

出来るだけさせたくなかった …… 13

気がすすまなかった …………… 11

子どもはすぐ慣れると思った …… 9

気分転換になると思った …………… 1

特に何も考えなかった …………… 1 (一部複数回答)

となっており、ほとんどが新居購入のための転居であるにもかかわらず、転校はさせたくなかったとしている。また親の転校に際しての心配(複数回答)では、友人(13名)、勉強(12名)に次いで、学校への行き帰り(11名)が挙げられている。調査実施当時、幼女誘拐事件が多発しており、親の心配が

特に高かったことがうかがえる。

### ① 教師の見る適応

担任の教師は、転校生がどれ位の期間でクラスに慣れたと見ているかを調べた結果、

1か月	5名
2～3か月	21名
3学期になってから	3名

となった。

転校生が慣れてきたと判断する教師の基準は、「教師に気軽に質問等、話しかけにきた時」、「友達にどんな事でもよいから、物事を頼まれたり、頼んだりするようになった時」、「朝の顔の表情や明るい声で返事ができるようになった時」、「話し合いの中で、自分の意見を言い出した時から」、「前の学校の話をよくするようになった時」、「休み時間の友との遊びの様子」、「給食のとき笑顔で話しながら食事をしている様子を見た時、及び外遊びで大声を出して楽しそうにしている時」、「友達数人と休み時間に遊ぶことが数日続いた時」等が挙げられており、クラスメートや教師に話かけられるようになった時や休み時間にクラスメートと楽しく過ごせるようになった時が基準とされている。

### ② 子ども達の感じる適応

転校生自身の内面的適応に焦点を当てるために、前の学校と現在の学校を比較して、どちらの学校が好きかを聞いた。気持ちがほぐれる時期を明確にしたいという意図から、転校後2か月と6か月の面接時の返答をまとめてみたのが表3である。面接に際しては、1年生から6年まで比較的是っきりと意見を言う者が多く、「わからない」と述べた者も両校の差異点については的確に指摘していたが、どちらが好きかは態度を決めかねている状態であった。どちらも同じ位好きだと答えた場合に「同じ」とした。2か月から6か

表 3. A. 子どもたちの感じる適応

第1期 (9月転入)	どっちがいい?	
	2か月:理由	6か月:理由
No		
1 A男 (6年)	前	同じ (前より明るい)
2 N子 (6年)	前 (友達)	同じ (転校は2回目)
3 Q子 (6年)	今 (前の先生はおこってばかりだった)	前 (にぎやかだったから)
4 A子 (5年)	前 (教室がわからない, きまりもちがう)	前 (慣れてるから)
5 B子 (5年)	わからない	前 (いろんな友達がいたから)
6 C子 (5年)	前 (わがままな子が今は多い)	前
7 C男 (5年)	同じ	前 (友達がいい)
8 F男 (5年)	今 (クラスの雰囲気がいい)	今 (なんとなく)
9 H男 (5年)	わからない	同じ (友達はこっちかな?)
10 T子 (5年)	前 (友達)	前 (雰囲気がいい)
11 E子 (4年)	わからない	前 (友達が近くにいた)
12 J子 (4年)	前	前 (先生も友達も)
13 S子 (4年)	わからない	今 (遊具が楽しい)
14 G子 (3年)	今 (早く転校したかったから)	今
15 D子 (3年)	同じ (友達クラスの雰囲気がいい)	前
16 I子 (3年)	今 (友達, 先生の教え方がいい)	今
17 K子 (3年)	前	前 (先生, 友達)
18 D男 (3年)	わからない (言葉が通じなかった)	前 (慣れてるから)
19 F子 (2年)	前	同じ
20 B男 (2年)	前	前 (先生, 友達)
21 O子 (2年)	同じ (友達 先生), 2回目	今 (先生はどちもこわい)
22 E男 (2年)	わからない (友達は前かな?)	前 (先生)
23 R子 (2年)	今 (友達, クラスが一杯ある)	前 (慣れて友達一杯だから)
24 U子 (2年)	前 (先生・友達)	前 (友達・先生がやさしい)
25 H子 (1年)	今 (鉄棒・タイヤ遊び)	今
26 L子 (1年)	前 (先生)	前 (大きいブランコがない)
27 M子 (1年)	今 (先生・友達・学校)	今 (友達が一杯いるから)
28 P子 (1年)	同じ	今
29 V子 (1年)	前	前 (友達)
	<u>2か月</u>	<u>6か月</u>
今の方が好き	7	8
前の方が好き	12	17
同じ	4	4
わからない	6	

転居理由: 転勤 4 転居 15 その他の理由 1

月へと時間が経過すれば自然に新しい学校が好きになるかという点、意外にそうではなく、前の学校の方が好きだとする者の方が多くなっている。これは2か月時に「わからない」と態度を保留していた者が、6か月では前の方がいいと答えているため、前の方がいいと回答した子どもたちの多くは「前の方が慣れてる」点と、「前は友達が近くに住んでた」「いろんな友達がいたから」「友達が一杯いたから」と友人関係を理由に挙げる者が多かった。これは、6か月ではまだまだ以前のような様々な友人関係が確立できず、物足りなさを感じている為と考えられる。

### ③ 適応を促す要因

転校当初から新しい学校が好きだと答えている者は、どのような特徴があるかを見てみよう。No.14のG子とNo.25のH子はきょうだいで都内からの転入であるが、二人とも転校当初から「今の学校が好きだ」と答えている。母親の話では「以前の学校でG子が給食を配ってくれた先生にありがとうございますと大きな声で言ったら、全体の調和を乱すのでよくないと注意されたんです。それ以来早く転校したいと考えていて……。転校先はどこでもよかったです。子どもが自由に外で遊べる場所と思い、緑の多いこの地を選んだんです」ということだった。G子の場合は前の学校での否定的な体験が強く印象にあり、その分現在の学校を好意的にとらえているようであった。妹H子の場合は「鉄棒・タイヤ遊びが一杯できるから今の学校が好き」と答えているが、面接時に母親から何度か「移ってきてよかったね」といった声かけが子どもたちに行われていたことから、母親とG子の肯定的な態度が、かなりの部分H子にも影響を及ぼしているのではないかと感じられた。これはNo.16のI子の場合も同様に感じられたことである。半年後の新居完成後には再び隣の小学校へ転出することが決まっていたI子の場合も、母親が新しい住環境に対し好意的な態度を終始とっており、I子の言葉にも不安は感じられなかった。これらのことから親が新しい環境を肯定的・積極的に認知することが、子どもの新しい環境への適応を促進すると考えられる。

No.28のP子はNo.22のE男ときょうだいである。P子の転校当初の教師のコメントには、「たいへん気が強く男の子ともいっしょにけんかする。授業中も手をあげて発表することも多い」とあり、本人も「学校での遊び？ウーン、教室であばれてる。前？前は教室でけんかしてたの」と答えている。非常に活発で外遊びが好きでサバサバした性格である。No.27のM子もP子ほどではないが活発で、転校当初の教師のコメントにも「大変明るく活発な子で……この頃では男の子に手を出してかまいずらをしている程活発です」とある。このように活発な低学年の女子の場合、男子よりも短期間で新しい学校が好きになるようである。

No.8のF男の場合は、転入後の市内体育祭で陸上競技に参加し4位に入賞し、このことがきっかけとなってクラスメートから一目おかれるようになった。

次に6か月経過した時点で「今」または「同じ」と回答し、新しい学校での居心地よさを感じはじめている者を見てみよう。No.2のN子とNo.21のO子は、ともに2度目の転校である。N子は「転校して困ったことは別になかった、だって2回目だから……。でも今回は派手に悪口とかイヤミ言ったり無視する人がいてびっくりした。最初に声かけてくれたリーダー的存在の人のグループと遊んでたけどイヤになって……。だって自分の意見を通すというか強引なところがあるの。グループには3人いたんだけど1人ぬけて、私もぬけたの。今のグループは楽しい。転校してうれしかった事は友達がすぐ出来たこと……私の方から話かけるけど……」とのべ、高学年の女子ではグループがすでに出来上がっており、既成のグループの中に入っていく難しさを感じている。しかしN子もまた転校経験者であるだけに、「最初に声をかけられた時に率直に返事して、とりあえず当分続く仲間に所属し、そのうちに自分に一番気の合う友人を探す」といった横島の報告にある転校経験者の知恵のようなものを習得している。

No.19のF子の場合は、前述のM子やL子と同様活発な低学年女子のパターンで、「過日掃除時、男子生徒にほうきで頭部を軽く接触されたとき、激怒



し、大げんかをした。泣いたが言い分を通した。しっかりしてると感じた」と担当教師にコメントされている。

このように転校後比較的短期間に新しい学校の方が好きだとする子ども達には、共通点がみられる。

- ①低学年で活発な女子
- ②転校経験者
- ③保護者が新しい学校環境を非常に肯定的に見ている場合
- ④得意の分野で能力を発揮する機会を与えられた場合

である。

#### ④ 転入時期と年齢と友人数

転入生がクラスに受け入れられる場合、1, 3, 5年時と2, 4, 6年へのクラスに転入するのでは違いがみられるようだ。1, 3, 5年時はクラス編成が行われる学年であり、この学年では友人関係もそれ程固定しておらず、転校生も比較的スムーズに友人関係を形成することができるが、クラス編成が行われない2, 4, 6年では、すでに1年間同じクラスのメンバーですごした後であり、友人関係が比較的固定化している傾向にある。従って1, 3, 5年次への転入よりも2, 4, 6年次への転入の方が難しさがあるようだ。

また女子では高学年になるとグループ化が顕著で、各グループが転入生獲得のため転校当初は声をかけるが、一旦グループが決まると他グループからの声かけがピタリと止まったり無視されたりすることもあるようで、この落差が動揺の原因となっている場合もある。

調査開始当初、友人の数が子ども達の適応を測定するのに有効な方法になるのではないかと考えたが、友人数はそれほど有効でないことがわかってきた。沢山の友達の名前を挙げながら前の学校の方が良いとする子どももいれば、ごく少数の友人の名前を挙げて今の学校の方が好きだとする者もいた。多くの友人と遊んでいた子どもにとって6か月は以前と同様な様々な交友関係を成立させるのに十分な期間ではなく、また一方特定の友達と遊ぶ傾向の

ある子どもにとって6か月はある程度満足のいく期間であろう。さらに友達と直接かかわって遊ぶタイプの子どもと、友達が遊んでいるその周辺でそれを見るのを楽しむタイプの子どもがいるようである。このように子どもにとっても友人との係わり方はきわめて様々で個人差があり、安易に友人数で適応を測れないことがわかってきた。最終的には本人の“適応感”によるのが最も有効であろう。

## 5. 終わりに

国内を移動した転校生29名を対象としたごく小規模の調査であり、また調査地による特性（転居が圧倒的に多い、転校生に比較的慣れた学校文化）も考えられるので、これらの結果を安易に一般化するのには慎重でなければならない。しかし転校生本人、担任教師、保護者の3者への面接調査に重点を置いた本調査では、担任教師の見た外的適応と、転校生の感じる内的適応に、やはり差が生じている。転校生を観察した担任教師の4分の3が2～3か月で適応していると答えているのに対し、転校生自身は転校後6か月を経過した時点でも、まだまだ前の学校の方が居心地がよいと感じている者が半数以上いる。すぐに慣れると思われている国内転校の場合でも、内面的な適応には時間がかかっているのがわかった。

転校を促進する要因として、①低学年で活発な女子、②転校経験者、③保護者が新しい学校環境を非常に肯定的に見ている場合（促進的環境としての認知）、④得意の分野で能力を発揮する機会を与えられた場合、をあげることができる。その中でとりわけ新しい環境への適応を促進する要因として、③の促進的環境としての認知、即ち新しい環境そのものを肯定的・積極的に認知するという態度を考えてみる必要がある。例えば親の転校に際しての考えは、旧態然として否定的であり、こういった転校に対する否定的な考えそのものが、子どもの適応を阻害していると考えられる。現在のように社会の流動性が増している時代に、転校を「望ましくない影響を与えるもの」としてのみとらえるのではなく、転校を適応訓練の場として評価し、研究がすす

められるべきであろう。

「新しい環境への適応」といったテーマの研究については、様々な研究分野で関連する研究が行われていると考えられる。しかし現在、適応に関する用語そのものが多義的になっており、さらに訳語のちがひ、類似語の多さなどの問題もある。今後は異研究領域での交流を頻繁に行うためにも、しかるべき形容詞などをおいて適応の意味の限定を行ったり、その都度適応の定義を明確にしたりする配慮がなされるべきであろう。

### 引 用 文 献

1. 日本経済新聞 1989年9月9日夕刊 今や貴重な労働力 築地市場
2. 日本経済新聞 1989年9月20日 迫られる“開国” 急増する外国人労働力
3. 塚本美恵子 1987 母親の異文化体験－母親の現地社会参加に対する積極度と、帰国後の母親の再適応と子供の適応の関連についての研究－東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要 第4集 33－60頁
4. 小林哲也ほか 1978 在外帰国子女の適応に関する調査・報告 京都大学教育学部比較教育研究室 55－56頁
5. フリップ・ブック 1977 江淵一公訳 「現代文化人類学入門」 講談社 第2巻 291－292頁
6. 塚本美恵子 1989 帰国子女の適応過程－帰国年齢・経過期間との関連についての母親の調査報告－ 東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要 第5集 93－110頁
7. 北村晴朗 1965 「適応の心理」 誠信書房 11頁
8. 香原志勢 1988 人類学講座「適応」 責任編集 香原志勢 雄山閣 3－30頁

9. 大塚柳太郎 1987 文化人類学事典 石川栄吉, 他 (共編)  
弘文堂 500頁
10. 香原志勢 1988 前掲書
11. Wapner, S. , Kaplan, B. , Cohen , S. B. 1973  
An organismic developmental perspective for  
understanding transactions of men in  
environment. *Environment and Behavior*,  
11, 3-32頁
12. 星野命 1987 帰国子女の適応 (自文化復帰) Health  
Sciences Vol. 3 No 1 日本健康科学学会誌  
30-34頁
13. 箕浦康子 1985 子供の異文化体験 思索社 123
14. Spiro, Melford E. 1966 Buddhism and Economic Action in  
Burma. *American Anthropologist* 68  
1163-1173頁
15. Taft, Ronald 1977 Coping with Unfamiliar Cultures. In  
*Studies in Cross-Cultural Psychology*. Neil  
Warren, ed. New York: Academic Press  
121-153頁
16. 箕浦康子 1985 前掲書 283-284頁
17. Piaget Jean 1970 The Stage of the Intellectual  
Development of the Child. In *Readings in Child  
Development and Personality*, Paul Henry  
Mussen, John Janeway Conger and Jerome  
Kagan. eds. New York: Harper & Row.
18. 箕浦康子 1985 前掲書 248-252頁
19. Adler, P. S. 1975 The Transitional Experience: An  
Alternative View of Culture Shock, *Journal of*

## Humanistic Psychology.

20. 箕浦康子 1988 日本帰国後の海外体験の心理学的再編成過程－帰国者への象徴的相互作用論アプローチ 社会心理学研究 第3巻第2号 3-11頁
21. 教育相談事典 1966 金子書房 483頁
22. 横島章 1977 転校生の交友関係の成立過程 教育心理 Vol. 125 No. 3 224-228頁
23. 中川弘美 1977 心のパイプが大切 教育心理 Vol. 123 No. 3 日本文化科学社 179-180頁
24. 大庭茂美 1986 転校の発達に及ぼす影響についての研究(1) 日本教育心理学会 第28回総会 発表論文集 554-555頁

**ADJUSTMENT FOR NEW ENVIRONMENTS**  
**—The Concept of TEKIO (Adjustment)**  
**and a Survey Report on School Transfer**  
**Children's Adjustment—**  
**(English Résumé)**

Mieko Tsukamoto

The purpose of this paper was to clarify the concept of the term "TEKIO" and to report on the result of a survey done on school children who transferred schools.

The term "TEKIO" originally used in biology is now commonly used. Although the function of "TEKIO" might be same, the concept or the definition of the term shows delicate shades of meaning depending on the research field. The English term of TEKIO is also different, like "adjustment" in psychology and "adaptation" in anthropology. In addition to these differences, the term "TEKIO" has a lot of synonyms. To make the concept clear and to avoid confusion, the term TEKIO should be used with a definition or an appropriate adjective.

The aim of this survey was to determine the length of adjustment time and to identify facilitating factors when children encountered new environments: new schools, new classes and new friends. 29 school transfer children, their teachers and parents were administered questionnaires and later interviewed. Most teachers, 21 out of 29, concluded that these school transfer children adapted within a couple of months. On the other hand, more than half children (17 out of 29) still preferred their former schools even when 6 months had passed. From an analysis of this survey, the following facilitating factors were identified: (1) prior school transfer experience, (2) parents positive attitude toward new environments, (3) active and outgoing girls in

lower grades, (4) children who were given a chance to show their talent or skill among their classmates.